



見えない「子どもの貧困」を考える

ジャーナリスト いけに たかし 池谷 孝司

「子どもの貧困」は見えにくい。「日本にあるの？ごく一部だよ」とよく聞かれる。だが、見えにくくだけで、厳しい家計の子どもは多くの人の目の前にいる。それを見える形にしたのがこの本だ。普通の小中高校と保育園を取材し、見ようとしないと見えないけれど、つらい状況にある当事者の話をまとめた。

ある定時制高校の女子生徒は家庭の事情からアルバイトを3つ掛け持ちし、学校が終わると深夜営業の店で働いていた。終電後、駅前の多目的トイレで寝泊まりする毎日だった。半年ほど取材を重ねると「親にも話してないんですが」と言いながら、やっとこのことを話してくれた。腹痛でも病院に行けない無保険の子どもや、親の借金から車上生活していた保育園児を児童相談所が一時保護したケース、前日の給食のパンと牛乳を朝食として出す保健室に集まる小学生など当事者の声が多く出てくる。どれも献身的な教師が支えたからこそ見えた貧困だ。服の汚れを見つけ、「おなががすいた」という声を聞いていても見逃す教師は少なくない。子どもは貧困を恥だと感じて隠す。親も同じ。だからなかなか見えないが、外部からこの問題に気づく機会が一番多いのは学校だろう。

定時制高校の先生は自戒を込めてこんな経験を語った。授業中、携帯電話で話していた男子生徒に「電源を切れ」と注意すると、「生きる権利を奪うのか」と反発されたという。生徒はその夜の仕事の依頼を電話で受けていた。先生は「生徒は携帯がないと仕事もできない」と初めて認識した。多くの教師は『携帯はぜいたく』と外見で判断するが、「それでは家庭や生徒の実態は見えない」と話した。

取材を通じて、学校と家庭を結ぶ「スクールソーシャルワーカー」を増やす必要性を感じた。教師たちは生活保護の申請を手伝い、児童相談所につなぐまでの一時保護など実質的にスクールソーシャル

『ルポ 子どもの貧困連鎖』
—教育現場のSOSを追って—
著者 保坂渉・池谷孝司 発行 光文社 定価1600円十税



ワーカーと同じ仕事をしていた。多忙な教師に任せるのは無理な話だ。問題解決に手を貸すスクールソーシャルワーカーを増やす必要がある。いい意味での「お節介」も必要だと感じた。ほぼ毎日、保健室で朝食をとる小2の女の子がいた。雨だとサンダルで登校する。「お金がなくて新しい靴が買えない。穴が空いていて濡れるからどうせ同じ」と話した。養護教諭が家庭訪問すると、母子家庭の母親はうつ病だった。その母親は私にこう話した。「最初は、保健室の先生がどうしてうちに入るのか、強引だなあと思った。でも、今考えたら、ありがたいお節介でした。生活保護の手続きとかやってもらって。人間関係が苦手だから、慣れるまではうっとうしかったけど」。お節介は問題解決の一つの鍵かぎになりそうだ。

改善策を考えるため、岩波新書『子どもの貧困』の著者の阿部彩さんや、東大教授の本田由紀さんら専門家のインタビューも収録した。ぜひお読みくださって、日本の「子どもの貧困」を一緒に考えていただければと願う。